

『燕京婦語』の社會的方言 kè について

鱒 澤 彰 夫

『燕京婦語』は、清末北京語の姿をよく伝える會話書である。既に『燕京婦語——翻字と解説』(1992年9月東京・好文出版刊)として刊行した。これを用いた語學的研究には、江藍生 1995 (『燕京婦語』所反映の清末北京話特色) 『語文研究』北京・語文出版社刊, 1994年第4期, 1995年第1期所収)がある。前著「解説」でも、『燕京婦語』に「去」を「克」で表記する點を最大の語學的特徴と指摘した。本稿は、「克」の社會言語學的用法について、改めて論じたものである。

[I] 『燕京婦語』の簡単な紹介

1. 『燕京婦語』の形態的特徴について

『燕京婦語』は全2冊、總計129丁で、全22課、約1萬8千7百華字から成り、上段に中國語(聲調と有氣音を示す朱點を付す)、下段に日本語を配した、寫本(北邊白話譯及び寫)の會話テキストである。刊本ではなく寫本である點に、『燕京婦語』の形態的特徴がある。

2. 『燕京婦語』の内容的特徴について

『燕京婦語』は、そのネーミングから察せられるように、寫本の完成した1906年頃の北京の、かなり上層⁽¹⁾の滿州旗人の、就中、婦人の日常生活を中心とした會話集である。つまり、『燕京婦語』の内容的特徴は、女性の會話書である點にある。また同時に、日本の女性中國語學習者のために編まれた點にもある。この2點は、ともに日本の中國語教育史上畫期的なものである。そして、これらについては既に拙稿で中心的に論じた。⁽²⁾

3. 『燕京婦語』の形式的特徴について

『燕京婦語』の形式的特徴は、ト書きのない芝居の臺本の如く、例えば、第11課では、「右所書有甲記者乃外國人東道主言(右の課中甲と記すは外國人にし

て主人役なり)」の如く、「登場人物」の身分を配役表で明確に示している点にある。現代でも多くの會話テキストは、その會話内容から登場人物の身分や關係を確定させる、或いは想定させる形式を採用しており、『燕京婦語』のような形式⁹⁾のものは少ない。「登場人物」の身分や關係の明確な設定は、言葉使いから人間關係を捉えるという不確定さを回避させ、逆に、身分關係と人間關係から、言葉使いを再吟味できる點で『燕京婦語』を有用な資料にしている。

〔II〕『燕京婦語』で表記された「克」——「去(kè)」

去を克(kè)と表記する總計92例を數える豊富さは、『小額』⁴⁾の12例を遙かに凌ぐもので、他の資料⁵⁾には見られぬ『燕京婦語』の特徴である。

『燕京婦語』の豊富な用例に見られる「克」の語法的特徴⁶⁾は、“您家克了(22-121丙⁷⁾)”のように“「動作の目的地」+去+文末助詞”の形式で單獨動詞として使用される以外は、單獨で、或いは第1動詞では用いられず、“上學克了(1-06乙)”のように第2動詞で、或いは“剛唱過頭一個戲克(12-121子)”のように補語として用いられている。これは『小額』の用例と一致している。本稿《資料篇》に、『燕京婦語』と『小額』に於ける「克」の用例を列挙したので参照されたい。

ところで、北京語「去(kè)」の記載は、T. F. Wade『尋津錄』(1859年刊)のPeking Syllabaryに去にc'hüとともにk'oとして見られ、同じくT. F. Wade『語言自邇集』(1867年初版刊)のPeking Syllabaryも同じ記載であるが、「練習燕山平仄編」のk'o欄では去を採っていない。このため、この部分をそのまま翻刻した廣部精編『亞細亞言語集』⁸⁾には「去(kè)」はない。また、J. Edkins, *Progressive lessons in the Chinese spoken language* (1862年初版刊)に「k'ü」と注音する4例⁹⁾(「c'hü」と注音する38例)を確認できた。しかし、これらは「克」の語法的特徴と一致しないものを含み、該書の注音説明からもNanking Mandarinに基づく注音であると推測される。さらに、『燕京婦語』の成立時期と推定される1906年當時のものでは、C. W. Mateer『官話類編』(1906年第2版刊)には、「去(kè)」音はない。また、該書A Comparative Chart of the Sounds in Five Dialectの表には、去k'ü'はNanking soundでPeking soundではないこ

とを示している。

一方、同時期の日本の辭書類を見ると、明治 33 年序刊牧相愛著『燕音集』⁽¹⁰⁾には「チュキー」と「コー」の 2 音 (共に第 4 聲) を記すも、残念ながらこれは音節表なので用例はない。これ以外の、石山福治編『支那語辭彙』(明治 37 年 12 月初版文求堂刊)、岩村成允編『北京正音新字典』(明治 39 年 4 月初版博文館刊)、井上翠編『日華語學辭林』(明治 39 年 10 月初版博文館刊) 岡本正文『支那聲音字彙』(文求堂刊明治 38 年 4 月再版増刷本による)には、去(kè)の記述はない。

「克」の社會言語學的用法については、これまで、太田辰夫「滿州文學考」では、「旗人の使用する階級方言のうち漢語系のもの、すなわち狹義の旗人語」と定義し⁽¹¹⁾、その旗人語の 1 つに例示されている。さらに、胡明揚『北京語初探』⁽¹²⁾で「kè 这样的读音显然是一种受社会尊敬的读音, 使用 kè 这种的读音⁽¹³⁾可以在群众中一下子就显示了自己的旗人身分, 而当时这正是受尊敬的统治阶级一分子的身分。辛亥革命以后, 情况变了, kè 这种的读音就开始消失。」と述べている。とはいえこれまで、「克」の社會言語學的用法が旗人との関係で「階級方言」として檢證されたという譯ではない。しかし幸いなことに、この「克」の社會言語學的用法は、この『燕京婦語』の豊富な用例とその登場人物の配役明示という形式的特徴によって、確認することができるのである。

「克」の社會言語學的特徴とは、旗人の「克」の使用の特徴であり、それは旗人が「克」を採るか「去」を採るかの選擇比率に現われる。これは確率現象と見ることができる。それゆえ、その檢證には統計的假説檢定を行えばよい、ということになる。このとき、条件を一定にするために、前述の「克」の法的特点から、この語法的特点に對應する「去」の用法のみ「克」との選擇對象とすることにす。また江藍生 1995 によれば、第 11 課の發話番號 37 ~ 58 には語學的に不的確な表現が見られ、それらは日本人による書き換えである、とする⁽¹⁴⁾。そこでさらに、語學的に問題のあるこの部分を除くこととする⁽¹⁵⁾。

以上のことから求め得た集計結果は次の通りである。

《旗人の克》對旗人	8 0	《旗人の去》對旗人	1 9	計	9 9
對傭人	5	對傭人	4	計	9
對商人 ⁽¹⁶⁾	2	對商人	5	計	7

對日本人	4	對日本人	7	計	11
計	91	計	36	總計	126
《旗人以外の克》傭人對傭人	1	《旗人以外の去》傭人	12	計	13
		商人	10	計	10
		日本人	12	計	12
計	1	計	34	總計	35

以下、次の各項目を検證してみよう。

(1) 旗人の「克」と「去」の選擇と、登場人物のそれとの間に差があるか。但し、ここでは、中國人の言語調査であるから、日本人の用例は除外する。

これを危険率5%で差の檢定を行うと、旗人と非旗人の「克」と「去」の選擇には差がある、との結果を得られた⁽¹⁷⁾。なお、「克」が非旗人によって唯一使用されている例は、傭人による別の傭人への命令文に現われている。これは(旗人の)主人に成り替わっての言と解するのが妥當であろう。

(2) 旗人間での「克」と「去」の選擇には差があるか。

これについて次のように問題を立てる。

偶然的最大選擇率を0.7(偶然的選擇率の期待値は0.5であるが、その事象の曖昧さを勘案して、最大揺れ幅0.2として+方向にとったもの)とし、これを超えるとき優先的選擇と命名する。試行を99回行ったところ、旗人に對する「克」の使用が80回起った。このとき、旗人間での「克」の選擇は優先的選擇といえるか。

これを危険率5%で片側檢定した結果、旗人間での「克」の選擇は優先的選擇といえる、との結論を得られた。

これは、旗人間での「去」の選擇は二次的選擇といえることと同じである⁽¹⁸⁾。

(3) 旗人間での「克」と「去」の選擇と、對その他の登場人物との「克」と「去」の選擇に差があるか。

これについて次のように問題を立てる。

旗人の對旗人では、「去」、「克」の選擇機會99回のうち「克」の選擇は80回、對日本人では、その選擇機會12回のうち「克」の選擇は4回、對傭人では、選擇機會9回のうち「克」の選擇は5回、對商人では、選擇機會7回のうち「克」の選擇は2回であった。このとき、旗人の對旗人の「克」の選擇率と

對その他の各登場人物との間に差があるといえるか。

(a) 旗人の「克」は對旗人と對日本人との間に選擇差があるか。

これを危険率 5% で差の檢定を行うと、對旗人と對日本人との間に選擇差があるといえる、との結果を得られた。

(b) 旗人の「克」は對旗人と對傭人との間に選擇差があるか。

これを危険率 5% で差の檢定を行うと、對旗人と對傭人との間に選擇差があるとはいえない、との結果を得られた。

(c) 旗人の「克」は對旗人と對商人との間に選擇差があるか

これを危険率 5% で差の檢定を行うと、對旗人と對商人との間に選擇差があるといえる、との結果を得られた。

以上をまとめると、

旗人は「去 (kè)」を旗人内部の言葉として使用し、「去 (qù)」は旗人外部の言葉として使用していたことを示している。同時に、非旗人も「去 (kè)」を旗人内部の言葉であるとし、基本的には用いなかった。勿論、傭人に對しては生活上で旗人内部に屬することから同様な程度に用いるが、傭人自身は旗人内部に屬さないから、傭人が主人に代わって別の傭人などに命令する場合を除けば、傭人が基本的に「去 (kè)」を使用することはなかったと思われる。そして、去 (kè) が旗人と非旗人とを分別する作用を果し、旗人自身と接觸する非旗人との間にはその分別作用を是認する默契が存在していた、と見てよいであろう。つまり、「去 (kè)」は、地域的な分別で律する方言ではなく、階層的な分別で律する社會的方言、或いは階層的方言である。『小額』の例も、以上のことを否定するものではない。

「去 (kè)」は使用場面では効果的ではあるが、記録に残り難く、さらにその後の歴史によって、地域的方言に比し注目されにくく、埋没したのである。

明治初期の優れた中國語學者で外交官の鄭永寧は「清國官話について」(假題)⁽⁹⁾で、1870年代の北京の中國語の實態を次のように述べている。

官話ハ明末清初二ニ在テ南方ニ止リタルモノノ如シ、南人北語ヲ爲スヲ屑トセス (中略) (中略) 餘、北京ニテ南人ノ入閣セル學士、堂上ニ在テ親王以下滿大臣ト語ルヲ見ルニ、其言フ所自ラ南北混合ノ音アリ、官位愈高ケ

レハ北語愈疎ナリ、親王及滿大臣モ之ト語ルニ單ニ宮殿口氣ヲ操セス、且ツ南人ハ官話ノ素アルヲ以テ、勉強ニ北音ヲ操セサルモ、北人亦能ク推解ス、(讀點は引用者による)

この發言は、滿州旗人と漢族官吏との言語の交流と斷絶の姿を示すものであるが、漢族官吏の反滿感情を底流にした「南人北語ヲ爲スヲ屑トセス」という心情が、指導層の共通の社會方言の形成とは別の・「宮殿口氣」と表現された滿州旗人の社會的方言の形成に一役かったことを窺わせるものでもある。

〔Ⅲ〕 社會的方言「去 (kè)」の埋没

1860年代から清末まで在北京の内外の北京官話學習者は、旗人を先生として學習するのが通例のようであったから、「去 (kè)」の存在を知っていた可能性は高く、『燕京婦語』に於ける「克」の使用の豊富さから見て、それが「官話」でなく旗人特有のものであることをも觀察し得ていたと推測はできる。それゆえ、北京官話學習の點から、T. F. Wadeが「去 (kè)」の存在を知りながら本文に採らなかつたことは、見識であった。その上、その後の清朝崩壊による旗人階層の没落とともに、その言語も社會的價值と意味を失ってしまった。このため、日本に限ってみても研究書やテキストで「去 (kè)」の社會言語學的用法について言及される機會を失つたと言えよう。そして、『燕京婦語』はその形態的特徴である寫本のゆえに斧正を逃れ、記録に留められた、と言ふべきであろう。一方、刊行時期・登場人物・構成・内容ともに『燕京婦語』に類似する馮世傑、市野常三郎、高木常次郎共著『燕語新編』(京都・干城學校藏板・明治39年4月大阪・積善館刊)には「去 (kè)」は見られない。これは刊本であるがゆえに、正確には北京官話に書き直された、と言ふべきであろう。

去 (kè) が日本の辭典に現われるのは、清朝崩壊後のことで、旗人とは無關係な地域的方言研究の成果によるものである。それゆえ、去 (kè) が權寧世編『支那四聲字典』⁽²⁰⁾、井上翠編『井上支那語中辭典』(昭和16年10月東京・文求堂初版刊)に現われたとき、當然ながら旗人とは無關係に紹介されたのである。

「克」の社會言語學的用法が明らかにしたものは、我々外國という外部、そして内部に更に國家13級で括れた瓢箪型情報構造をもつ中國、という現代の

關係と相似な關係である。すなわち、「克」は、「隱語」とは別の、外國人の我々にはなかなか見えて來ない内向きの言葉の存在を明らかにしたばかりでなく、そのような存在に對する我々の探求の必要性をも示唆しているのである。

(了)

《資料篇》原本の字體は正字體に統一した。

【克の用例】括弧内は(課數-發話番號, 發話者, 對旗人は無印、對日本人はJ、對下僕はS、對商人はM)を示す。對人別出現順に配列。

- | | | |
|------------------------------|---|----------------------------------|
| 01) 二大爺進裡頭克了麼
(1 - 03 甲) | 19) 有工夫兒克 (5 - 101 丙) | 35) 我過克 (12 - 187 乙) |
| 02) 進裡頭克了 (1 - 04 乙) | 20) 我們姑娘他們逛香山克
(6 - 04 乙) | 36) 您往裡克罷 (12 - 188 丑) |
| 03) 上學克了 (1 - 06 乙) | 21) 您姑娘同着誰逛克了
(6 - 05 甲) | 37) 您往裡克 (12 - 189 乙) |
| 04) 上街溜達克都快回來了
(1 - 16 乙) | 22) 不少那一天都有人去逛
克 (6 - 20 乙) | 38) 怎麼您不等着晚上回克
呀 (12 - 244 午) |
| 05) 有工夫兒克 (1 - 27 甲) | 23) 那兒還常有外國人去逛
克哪 (6 - 21 甲) | 39) 您回克 (12 - 256 壬) |
| 06) 您上舖子克麼 (2 - 03 婦) | 24) 我們逛克 (6 - 30 乙) | 40) 差一點兒沒陞到廣西克
(13 - 40 乙) |
| 07) 待會兒克 (2 - 04 男) | 25) 有一回我們逛克 (6 - 34 乙) | 41) 您要把張裁縫帶了克
(13 - 52 乙) |
| 08) 上衙門克了麼 (2 - 04 男) | 26) 要是熱的時候兒進那裡
頭克, 可就涼快着的哪
(6 - 39 甲) | 42) 您帶了張裁縫克也好
(13 - 53 甲) |
| 09) 上衙門克了 (2 - 05 婦) | 27) 您上我們那兒坐着克呀
(6 - 56 乙) | 43) 張裁縫也願意跟了您舅
舅克 (13 - 54 乙) |
| 10) 二爺作買賣克了麼 (2 - 08 男) | 28) 打嚕們這兒連那個東西
就叫人給送了克了 (12 - 09 甲) | 44) 跟班兒的您要帶了誰克
呢 (13 - 55 甲) |
| 11) 您姪兒作買賣克了 (2 - 09 婦) | 29) 咱們叫人削幃子克呀
(12 - 10 乙) | 45) 您要帶了劉昇克 (13 - 56 乙) |
| 12) 我找他說話兒克 (2 - 22 男) | 30) 今兒就叫他們拿這個幃
子給削克 (12 - 29 甲) | 46) 您舅舅說帶趙福克 (13 - 56 乙) |
| 13) 趕明兒克 (3 - 34 女) | 31) 剛唱過頭一個戲克 (12 - 121 子) | 47) 打雜兒的老郭還要跟出
克呢 (13 - 58 乙) |
| 14) 我姥爺上那兒克了 (5 - 26 甲) | 32) 您今兒個沒進裡頭克麼
(12 - 151 卯) | 48) 您回克 (13 - 76 乙) |
| 15) 您進裡頭該班兒克了
(5 - 27 丙) | 33) 我給大婢兒叩頭克 (12 - 170 辰) | 49) 我帶你買布克 (14 - 03 甲) |
| 16) 他上您姐姐那兒克了
(5 - 29 丙) | 34) 請您棚裡坐着聽戲克
(12 - 179 壬) | 50) 上那兒買布克呀 (14 - 04 乙) |
| 17) 我兄弟他們都上學克了
(5 - 30 甲) | | 51) 上後門買布克 (14 - 05 甲) |
| 18) 都上學克了 (5 - 31 乙) | | 52) 你往裡克 (14 - 32 甲) |
| | | 53) 二嫂子您上那兒克 (14 - 42 庚) |

- 54) 上後門克(14 - 43 甲) 69) 二哥昨兒您回克(22 - 82) 劉昇, 您跟了我克(12 - 76 乙 S)
- 55) 大兄弟上那兒克了(14 - 47 甲) 38 甲) 70) 我打這兒回克(22 - 83) 劉媽把鋪蓋和包袱甚麼的都擱在西屋裡炕上克(17 - 29 甲 S)
- 56) 咱們往那麼溜達着回克(14 - 66 甲) 52 乙) 71) 我就上富二奶奶那兒克(22 - 52 乙) 84) 買東西克罷(17 - 77 甲 S)
- 57) 您回克了(14 - 78 甲) 72) 我要去瞧瞧克(22 - 55 丙) 85) 你瞧瞧這個土拿擲子在院裡擲克(21 - 19 甲 S)
- 58) 回克了(14 - 79 壬) 73) 我也要瞧瞧克(22 - 56 甲) 86) 回克了(14 - 152 甲 M)
- 59) 咱們往那麼瞧瞧克呀(14 - 158 乙) 74) 我同着我大兄弟一塊兒到那兒瞧瞧克(22 - 57 乙) 87) 我們溜達着回克(14 - 154 甲 M)
- 60) 咱們回克(14 - 164 乙) 75) 我打算今兒就同您瞧瞧克(22 - 65 丙) 88) 我還要到太太府上望看々給太太請安克(4 - 71 中 J)
- 61) 二姐這兩天沒上那兒克呀(15 - 25 甲) 76) 我們先去瞧瞧克(22 - 70 乙) 89) 進裡頭克了(10 - 16 中 J)
- 62) 我家裡瞧瞧克罷(15 - 45 乙) 77) 艇再去瞧瞧克(22 - 70 乙) 90) 這幾天沒上那兒克(10 - 40 中 J)
- 63) 娘兒倆上我們那兒坐着克(15 - 49 乙) 78) 往那麼瞧瞧克(22 - 100 丙) 91) 我還要到太太府上請安克哪(10 - 42 中 J)
- 64) 再瞧瞧花兒的克(16 - 48 甲) 79) 您家克了(22 - 121 丙) 92) 等着土落下克(17 - 30 丁 S 僕人趙の言)
- 65) 咱們瞧瞧花兒克(20 - 10 乙) 80) 等您搬過克(22 - 122 乙) 93) 你們吃飯克罷(12 - 67 乙 S)
- 66) 您和我兄弟商量商量再給您問克(22 - 18 乙)
- 67) 您就趕緊的給問問克罷(22 - 19 甲)
- 68) 我回克(22 - 26 乙)

【《小額》に於ける克の用例】括弧内は(頁-行, 對旗人は無印、對下僕は S) を示す。對人別出現順に配列。

- 01) 你們老太太也家克啦吧(p15 - 12) 05) 我瞧瞧克得啦(p20 - 5) 09) 您瞧瞧火克吧(p11 - 2 S)
- 02) 還沒家克呢(p15 - 13) 06) 你給拿三吊錢克(p24 - 2) 10) 瞧門克(p15 - 5 S)
- 03) 你們大奶奶怎麼沒跟克呀(p15 - 14) 07) 請回克(p27 - 4) S) 11) 老王瞧門克(p20 - 3)
- 04) 他們那一黨找我克啦(p16 - 3) 08) 我去瞧瞧克得啦(p27 - 12) 12) 你我快告訴太太克得啦(p41 - 4 S)

注

- (1) 例えば、「敵旗は鑲黃旗滿州」(第 4 課)、第 11 課では「王爺(殿下)」が登場する。
- (2) 前掲『燕京婦語——翻字と解説』「解説」。
- (3) 登場人物の多いことも大きな特徴である。日本の會話テキストは、『亞細亞言語

集』、吳啓太・鄭永邦『官話指南』の如く、空格でそれぞれの發話・發言の別を示すことから始まり、吳大五郎・鄭永邦『日漢英語言合璧』の如く、分かち書きでそれぞれの發話・發言の別を示し、さらに、分かち書きの上部にその發話者・發言者を明示する形式に進化していった。『燕京婦語』の先進性は寫本とはいえ明らかである。

- (4) 本稿は太田辰夫・竹内誠編『小額 社會小説』(平成4年8月東京・汲古書院刊)によった。
- (5) 太田辰夫「滿州文學考」(太田辰夫『中國語文論集』1995年5月東京・汲古書院刊所収による)(pp. 698-700)で言及する韓起初『劉巧團圓』(拙稿は1949年5月北京新華書店初版1953年2月人民出版社重排第1版本によった)には「咯」が15例見られる。さらに同書p. 16には語氣助詞「吧」と同じ用法もあることを注記する。但し、これらの「咯」は清末北京語ではなく、邊區(陝西)の方言である。また、趙傑『滿族話與北京話』(1996年7月遼寧民族出版社第1版第1次印)pp. 260-261では去(kè)を取り上げ、現在も北京・香山の滿州族老人が話す、とあり、これは古音殘存によるとする。但し、同書に舉例する“去(kè)香山”は『燕京婦語』の用例にはない。また、大東文化大學の大島吉郎先生のご教示により、『宮良當壯全集10 琉球官話集』(昭和56年6月東京・第一書房刊)p. 20を見ると、「去年」に注記し「二音刻」と「取」(?)を記す。該書には入聲もあることから、『燕京婦語』の「克」とは異なる。
- (6) 前掲の江藍生1995によれば、「動作の目的地+去」は現代北京語にも見られる用法であるという。
- (7) 課數、發話番號、發話者を示す。以下同じ。
- (8) T. F. Wade『語言自邇集』の單なる翻刻ではない。「談論編」「續談論編」は、明治9~13年に東京外國語學校に招聘された薛乃良、龔恩祿によると見られる語句の書き換えが少しあり、成立時期の明確なことから、語學資料として有用である。
- (9) 大東文化大學の大島吉郎先生のご教示によるその4例は①他不去。②把東西拿去。③我們全去。④老虎已經啣了他去。(②の「把」は1885年第5版本による)で、①と③は「克」の語法の特徴とは一致しない。
- (10) 卷頭著者名による。同書の孟繁英の序文はこれを御幡雅文著『清語字彙一卷』とする。牧相愛は御幡雅文の日清貿易研究所での教え子である。
- (11) 注5参照。同書p. 591には「旗人の用いる階級的方言を旗人語という」と同様に定義する。但し、前掲の注(4)の『小額 社會小説』p. 88では「方言音である」と注解する。
- (12) 1987年1月北京・商務印書館第1版第1次印。pp. 65-66。
- (13) ここでは「嘸」も特別應諾の感嘆詞とする。『燕京婦語』では「喳」と表記されており、旗人も、傭人、商人も使用しているが、旗人は彼らの前では使用していない。權寧世『支那四聲字典』昭和2年9月大阪屋號書店刊昭和3年3月再版本

- によれば、「此ノ音ハト共ニ極ク敬意ヲ表スル應答ノ聲ニシテ北京及ビ其附近ニ行ハル語ナルモ今ノ青年ハ殆ト此ノ語ヲ用ズ (p. 6)」とある。
- (14) 『語文研究』1995年第1期 pp. 15-16。ここではさらに、目前の日露戦争を話題とすることは、教科書という性格上、内容としても問題あり、とする。しかし、タイムリーな内容と旗人が日本人から情報を得ようとする場面自体は、この『燕京婦語』という會話書の性格にも、教科書としても何ら矛盾するものではない。
- (15) 該当する用例は、旗人の對日本人に使用する「去」の1例のみである。
- (16) 店員、職人、車夫を含む。
- (17) 傭人と商人とには「克」の選擇に差がないので、ここでは、兩者を合算して非旗人とし、旗人の「克」の選擇率と比較する。なお、檢定の解は省略する。以下同様。
- (18) 「偶然的最小選擇率を0.3 (偶然的選擇率の期待値は0.5とし、その事象の曖昧さを勘案して、最大揺れ幅0.2として-方向にとったもの) とし、これを超えないとき二次的選擇と命名する。このとき、旗人間での「去」の選擇は二次的選擇といえるか。」と問題を立てれば、原命題の對偶命題となる。
- (19) 原題は「鄭永寧演説」である。『興亞會報告』第4集 (明治13年5月14日東京・興亞會刊) 所收。この中で鄭永寧は「中州官話」を推す。一方、廣部精「官話論」(『興亞會報告』第12集 (明治13年11月13日) 所收) は「北京官話」を推す。前者は當時の中國語の實態に即した發言であり、後者はこれからの中國語の方向に即した發言であった。また、前掲Edkinsの「k'ü'」と「c'hü'」との混在は、彼が北京で聽いた官話の實態であったと説明できる。鄭永寧のこの觀察から、19世紀末の北京の言語は、下は北京の俗語 (北京方言)、上は一樣な北京官話ではなく北京官話は優勢であるが南北混在の狀況に あったと思われる。さらに、「親王及滿大臣モ之ト語ルニ單ニ宮殿口氣ヲ操セス」とあるのは、旗人が自分達自身の中國語をもち自分達内部で常用していたことを示すものであろう。
- (20) この字典の記述は、他の辭典より詳しい。「刻 k'è: 此ノ音ハ滿州山東其他ノ田舎ノ音ナルモ北京ニ於テモ一般俗語トシテ盛ニ用ヒラル、音トス (您上那兒-) (p. 131)」, 「去 chü: 官話トシテハ總テ此ノ音ノミヲ用フ (p. 67)」 (昭和2年9月東京・大阪屋號書店刊昭和3年3月再版本)。「去 chü: 北平ノ俗語トシテ此ノ (去) ヲ (k'è) 或ハ (k'è) トモ發音ス。」(『改訂支那四聲字典』 (昭和8年10月東京・大阪屋號書店刊昭和13年1月改訂3版本 p. 67)。

※本稿は、1997年10月23日、東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所「言語文化接解に関する研究」平成9年度第1回研究會に於ける發表稿を改めたものである。同日講演された入矢義高先生の御逝去に對し、ここに謹んで哀悼の意を表します。